

利保障、権利擁護を巡り保護者と向き合うことが求められ、ストレングスに着目したニーズ中心の「気づきを促す援助」が求められるであろう。今回は一事例へ取組みであったが、今後、面接力の向上に努め、多様な事例に取り組み、実践知を蓄積し、実践に活かせるよう考察を続けたい。

(引用／参考文献)

- ・鈴木純子「調査的面接の技法」中西出版 2009
- ・戈木クレイグヒル滋子「実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ現象をとらえる」新曜社 2010
- ・インスー・キム・バーグ, スーザン・ケリー, 桐田 弘江 他 (訳)「子ども虐待の解決—専門家のための援助と面接の技法」金剛出版 2011
- ・アンドリュウ・ターネル, スージー・エセックス, 井上 薫 井上 直美 (監訳)「児童虐待を認めない親への対応—リゾリューションズ・アプローチによる家族の再統合」明石書店 2009
- ・小木曾宏「家族援助の方法と実際(5)―「被虐待」と「非行」問題の世代間連鎖―」千葉明德短期大学研究紀要 25, 3-12, 2004

1) 日本社会事業大学専門職大学院 宮島清ゼミ

ソーシャルワークの機能に関する実践的考察

旭児童ホーム

院前期 2005 年卒 小 山 菜生子

名寄市立大学専任講師

院後期 2 年 松 岡 是 伸

I. 緒言

少子高齢社会がさらに進展する昨今、こどもを取り巻く環境や社会環境が変化してきた。児童虐待やネグレクトは増加傾向にあり、児童虐待防止法施行以来約10年で3倍以上の増加となっている。その中で痛ましい死亡事故も起きている現状である。

一方学校教育に目を移すと、2008（平成20）年より学校現場にスクールソーシャルワーカーが導入された。その導入の背景には、児童虐待やネグレクト、家庭への支援の必要性があり、児童生徒とその家庭に対する対応、そして地域でのコーディネート役となることを求められている。

このようにこどもを取り巻く環境は複雑多岐になっている中、ソーシャルワークもその要請に添えてきた。ソーシャルワーク実践の機能も拡大傾向にある昨今、その援助の質と量が重要とされるようになってきた。このことから援助の拡大と質の担保を実現するためにはやはり、ソーシャルワーク実践とソーシャルワーク実践理論若しくは理論を連動させた事例検討なり研究が必要となる。

そこで本研究は児童養護施設のソーシャルワーク実践事例を用いてソーシャルワークの機能を明確にしていくことを目的とする。その意義はソーシャルワーク実践を検討することにより、ソーシャルワーク実践の機能を明確にしつつその実践の積み重ねに多少なりとも貢献できるからである。

II. 分析の枠組み

1. ソーシャルワークの機能について

ソーシャルワーク実践の機能は、ソーシャル

ワークの原理原則、目的、価値があって成り立っている。それに従ってソーシャルワーク実践の機能は法制度によるものと、ソーシャルワーカーによるものに大別することができる。1997年に日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会により「ソーシャルワークのあり方に関する調査研究」（以下、1997年調査）によると、児童養護施設で最も活用されている機能は、保護機能であり次いで、直接的援助機能（処遇機能）、教育機能、代弁機能、仲介機能、組織機能、連携機能、調停機能、治療機能の順であった。児童養護施設という特質を考えるとやはり保護機能と直接的援助機能が上位になってきている。そのうえで筆者らは児童養護施設での実践事例とソーシャルワーク機能と役割について検討していた（2008）結果をふまえながら本事例の分析にあたり、ソーシャルワーク機能がどのように用いられているかを考察する。

さらに北川（2007）による、ソーシャルワークの機能と役割が拡大傾向にあるなかで個人の環境（または状況）に対する適応能力や対処能力、応答性を高めることが援助・支援の本質的関わりという視点をふまえ、複眼的に考察する。

2. ケース事例の分析枠組み

本ケース事例研究においてケース事例への着眼点は、(1) 施設生活、(2) 親子関係（週末帰省等）、(3) 学校生活である。これらの視点をもとにケース事例を整理した。

3. 倫理的配慮

本調査を進めるにあたり実践事例の使用承諾をM児童養護施設の施設長に頂いた。そして事実確認及び誤った表現がないかを当該施設で確認した。またケースを掲載する際に被調査対象者が特定できる表現は避けるなど、記述上必要最低限の登場人物及びキーパーソンのみの記述に留めた。

Ⅲ. 結果

はじめにケースの概要をあげ、その後学年別に

その状況を記述していく。本研究では対象児童Aの施設入所時から小5までの範囲を分析対象とする。それ以降については別の機会に譲るとする。各学年の状況は、施設生活、親子関係（週末帰省など）、学校生活と整理して記載する。（図 - 1 参照）。

1. ケース事例の概要；対象はM児童養護施設入所中のA（男児、中2、14歳）である。入所児の年齢は小1、6歳である（一緒に入所した妹B子は年中児）。家族関係は実父と妹のB子で現在、B子は同施設に入所中である。施設入所の理由は実父の養育が不可能となったためであった。

入所までの経過；Aが3歳のときに両親が離婚し、その後母方の祖母に養育されていた。だが母方の祖母の養育状況を心配した実父は、実母から親権を変更し引き取った。この頃実父は深夜から早朝におよぶ就労についており、Aと妹（B子）を養育するのは困難な状況であった。そのため実父が児童相談所に養育の相談をした。その後児童相談所からの助言を受けつつ養育をおこなっていたが、実父が体調を崩したことからAとB子を一時保護することとなった。実父は一時保護中の3～4か月の間もよく面会に訪れていた。しかしながら実父の養育が不可能な状態が続いたため施設にAとB子はともに入所することとなった。

2. 施設での援助方針；施設入所にあたり、以下のような援助方針を定めることとなった。

- (1) 親子関係の継続と形成…実父にはAとB子を養育していくイメージを入所児に確認し、さらに実父の養育意欲を評価しその具体的方法として毎週末に実父宅へ週末帰省をしてもらえるようになること。
- (2) Aの生活の安定…Aは誰に対してもコミュニケーションのとりかたが乱暴で、他者へ他害を及ぼす場合もある。そのためAが情緒的にも穏やかで、安定した生活を送れるような援助をできるようにし、Aの暴力行為への対応も検討していくこと。

事実経過	援助展開	ソーシャルワーク実践 機能
<p>○施設入所の経過</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aが三歳の時に両親が離婚、その後母方の祖母に養育される ・Aの実父が、実母から親権を変更しAとB子を引き取る ・実父が深夜から早朝にかけての就労だったため養育が困難となる。児童相談所に養育の相談 ・実父が体調を崩し、養育不能となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童相談所による養育の助言 ・一時保護 	
<p>○施設入所</p>	<p>○援助方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・父子関係の継続と形成 ・Aの生活の安定 	<ul style="list-style-type: none"> ・ケースマネージャー機能 ・保護機能 ・直接的援助機能
<p>○小学校一年生 (施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活は楽しそうであったが、暴力や暴言、嘘が目立つ(父子関係) ・毎週実父と面会・外出 <p>Aは実父と会うことに緊張している様子 B子はいきたがらない様子</p> <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aは不器用ながらもコミュニケーションを図っていた ・孤独 ・学業面は苦手 <p>○週一回のカウンセリングがはじまる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活での関わり ・専門職者によるカウンセリング ・面会や授業参観等親子関係を維持形成できるような関わり ・AやB子の気持ちの受容 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的援助機能 ・連携機能 ・ケースマネージャー機能 ・直接的援助機能 ・代弁機能 ・(心理担当職員による治療機能)
<p>○小学校二年生 (施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者に対して暴言や暴力あり、しばしば他児童から注意されることもあった。 <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週末帰省を継続的に行う <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暴力や暴言はなく、だらだら過ごしている様子 ・女子生徒に対して暴力や暴言が見られる <p>○少年野球チームに入団する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・暴言などへの指導 ・親子関係の維持と形成のための関わり ・多職種間でのカンファレンス開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的援助機能 ・ケースマネージャー機能 ・連携機能 ・調停機能
<p>○小学校三年生 (施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暴言がエスカレートする ・生活リズムに安定が見られる <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週末帰省は継続的に行う <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校の先生に対する甘え(ベタベタしたり等)が顕在化 ・同年代生徒に対する暴言はエスカレート ・授業中に落ち着きが見られず、時に教室外へ 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活周期の整えとその維持のための関わり ・父と職員間の信頼形成と維持 ・学校との連絡調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的援助機能 ・ケースマネージャー機能 ・連携機能 ・仲介機能
<p>○小学校四年生 (施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対人関係上のいざこざが絶えない <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週末帰省は継続的に行う <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中に喧嘩などが多く見られる ・学習がついて行くことができなくなる <p>○女子生徒にハサミを振り下ろす事件が発生</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生活周期の整いとその維持のための関わり ・学校、児相、施設等での連携した対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的援助機能 ・連携機能 ・仲介機能 ・調停機能 ・代弁機能 ・保護機能
<p>○施設内で学習支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な勉強会による個人指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育機能
<p>○小学校五年生 (施設生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・暴力と暴言がさらにエスカレートする状況 <p>(父子関係)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週末帰省は継続的に行う ・AやB子に大人に噛まれた跡を発見 <p>(学校生活)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別学級へ転籍 ・学校の担任の先生に対する独占欲が強くなる ・学級が退廃しはじめる <p>○少年野球チームを退団</p> <p>○精神科受診、服薬開始</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・施設生活への安定化のための関わり ・親子関係の維持形成のための関わり ・虐待の疑いに対する対応 ・学校等と連携した関わり 	<ul style="list-style-type: none"> ・直接的援助機能 ・ケースマネージャー機能 ・保護機能 ・ケースマネージャー機能 ・連携機能 ・(精神科による治療機能)

図ー1 小学校一年生から小学校五年生までのAの経過について

IV. 考察

Aの施設生活から小5（6～11歳）までを見てきた。ここではまず、Aの施設生活と親子関係、学校での生活を整理し、その後ソーシャルワーク実践の機能について考察していきたい。

1. ソーシャルワーク実践事例からの考察

(1) Aの施設生活について

Aの施設生活は、職員という大人への甘えと暴力、同年代の児童に対するコミュニケーション上の不和と暴力という状況であった。

(2) Aの親子関係について

AやB子は実父宅への週末帰省をおこなってきたが、二人とも週末帰省を嫌がる傾向にあったり、実父からの虐待の痕跡を見つけられたりと順調と言えない状況であった。このような中で施設職員や担当職員らが実父を支援することにより、A（とB子）と実父と関係を維持してきたという状況であった。

(3) Aの学校生活について

学校生活では孤立しつつも他の児童とコミュニケーションを図ろうとしていた。しかしながら大半のコミュニケーション手段は暴力的な行動であった。Aは学年が上がるたびに授業についていくことができなくなった。これに対しては施設生活の場でも学習支援への取り組みをおこなった。Aは学校の先生への依存度が強い。学校生活でも先生（大人）に対しては甘えを見せると同時に、依存性が見受けられた。

2. 実践事例とソーシャルワーク実践の機能

本ケース事例で主に使われたソーシャルワーク実践の機能は、直接的援助機能が最も多い。次いでケースマネージャー機能、連携機能、連携機能、保護機能、仲介機能、調停機能、代弁機能、教育機能であった。治療機能はみられたものの心理担当職員や精神科医師による他職種からの働きかけであり、児童養護施設ワーカーの視点からみると連携機能もしくは仲介機能ともいえる。

Aの生活において適応性や対処能力を高めるた

めにやはり、直接的援助機能が主に用いられている。次いでケースマネージャー機能であるが、これもAの適応性や対処能力を高めるための働きかけである。そしてケースマネージャー機能はこどもと親の関係維持・形成するための役割を担っていた。そして連携機能がやはり注目される。Aの生活の全体性を支援するためには単一の専門職だけでは困難であり、連携によって多角的に幅広く支える仕組みが必要である。この連携機能の活用によりAの応答性を多面的に把握できる。施設や学校、週末帰省においてAの応答性はそれぞれであるが、連携することによりAの状況の全体を把握し理解することができ、さらには次につながる適応性や対処能力を高める支援につなげることも可能である。その意味で連携機能はソーシャルワーク実践において重要な意味を有する。

これらのように一つの実践事例において様々な機能が用いられてきた。

V. 結語

本研究はこどもの最善の利益を確保するために、ソーシャルワーク実践事例をソーシャルワーク機能と関連させて分析してきた。その結果ソーシャルワーク機能はこどもの生活援助において随所に活用されていることが明らかになった。また、子どもの年齢や学年があがるほどにこれらの機能の活用拡大がみられた。こども自身が成長と発達を通じて社会参加の機会を多く持つ過程で不適応や対処できない出来事が見られたとき、福祉関連者が連携しそのこどもと環境（状況）を調整するのである。そこにソーシャルワーク実践における機能並びに役割の重要性が浮かび上がってくるのである。

文献

- 北川清一（2007）「2 社会福祉実践の枠組み ④ 役割と機能」仲村優一・一番ヶ瀬康子・右田紀久恵 監修『エンサイクロペディア 社会福祉学』中央法規
- 北島英治（2008）『ソーシャルワーク論』ミネルヴァ

書房

高橋重宏（1998）『子ども家庭福祉論——子どもと親のウェルビーイングの促進——』，放送大学教育振興会

日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会（1998）「ソーシャルワークのあり方に関する調査研究」，『日本社会福祉実践理論研究』（第7号）日本社会福祉実践理論学会

松岡是伸・小山菜生子（2008）「ソーシャルワーク機能と役割に関する一考察 —児童養護施設の実践事例をもとにして—」『名寄市立大学紀要 第2巻』名寄市立大学

山本佳代子（2011）「児童養護施設における実践研究に関する一考察」『山口県立大学学術第4号〔社会福祉学部紀要 通巻第17号〕』山口県立大学